

吳服尺

一御裝束寸尺の事、略○中以往より定まれる鐵尺をもて、辨代と一禰宜が前に於て、略○中神宮の奉行并物忌等さしまゐらせ、略○中

寛正四年五月日

〔書言字考節用集七器財〕吳服尺今按相當曲一尺二寸

〔律原發揮〕吳服尺者、以曲尺一尺二寸舊尺一尺二寸二分弱爲一尺量裁衣服用此尺故名

〔滋草拾露九冠并烏帽子〕一挾形ノ仕立ゴフケザシニテ

長サ壹尺 幅五分

〔寛永塵劫記一〕きぬもんめんうりかひの事

きぬもんめんの丈尺寸といふは、大くのかねに一尺二寸を、ごふく一尺といふ也、

〔天明八早算法〕壹尋は、曲尺にて五尺、吳服尺にては四尺なり、譬曲尺にて三尺六寸有、吳服尺にて

は何程と問、三尺六寸に定法の八を掛れば、二尺八寸八分と知る、

法の發は、吳服壹尺を、曲尺一尺二寸五分にて割たるなり、

○按ズルニ、此ニ云ヘル吳服尺ハ、曲尺一尺二寸五分ノ度ナリ、

〔律尺考驗〕尙衣局裁尺 尙衣局トハ、天子ノ御衣ヲツカサドル官府ナリ、此尺ハ本朝禁裏ノ御衣

ヲ調進スル高倉家ノ吳服尺也、其長大尺ノ一尺二寸五分ニアタレリ、今俗間ノ吳服尺ハ、只匠尺

ノ一尺二寸ヲ用フ、勢州ノ俗、ナホ古法ヲ失ハズシテ、十二寸半ヲ用ヒ、海鱸ノ鯨骨ヲ以テ作ル、コ

レヲ俗ニ鯨尺ト云、世ニ海鱸ヲ鯨ト呼ガ故也、

〔尺準考〕本朝裁尺本名吳服尺、一

今之朝紳高倉藤公、自古傳吳服尺以至今、調進主上御衣者即此尺也、以其用海鱸骨造故又名鯨尺、

俗間尙陋、以其尺八寸恰當大尺之一尺、而猶餘二寸、不知其二寸之比大尺二寸五分、故遂誤作一尺